

2009年度 SFC 研究所プロジェクト補助

「国際的連携による、地元資源を利活用した地域再生研究」

政策・メディア研究科 小林博人

研究課題:

慶應大学、マサチューセッツ工科大学、および米国環境デザインコンサルタントとの協働により、地域森林資源の活用による山村集落の持続的再生及び CO2 削減を目指す。地域森林からの木材提供により、地域文化を継承する古民家改修とコンバージョン、及び新築住宅の建設を促進し、地元林業の再興及び地域コミュニティ活性化、木材利用及び植林による環境改善を行い、過疎化、少子高齢化、獣害の問題を抱える山村に対する地産地消に基づく地域循環型の自立型地域再生手法を提案する。

研究の経緯:

2007年より継続的に行われて来た MIT との協働研究のテーマである、「地方循環型集落再生」は、近年世界的に注目されてきた日本の里山にみるエコロジカルな生活スタイルをベースにした持続可能な地方集落の再生を目している。地方集落をモデルとして、地元の物理的・社会的資源の有効利活用により、自然との共生によるエコロジカルな生活スタイルを見直すとともに、それらに現代の建築・情報技術を導入することによって基本的生活に求められるニーズを加味した新しい生活スタイルの考察を行ってきた。そして生活を支え地域微文化を醸成してきた地元の基幹産業である農業・林業の振興を行うための問題発見と発展可能性を検討してきた。これらの活動は、対象地域の活性化に役立つばかりでなく、同様の問題を抱えた他の多くの地方集落再生に寄与するのみならず、その手法はエコロジーを考慮したこれからの町づくりに貢献しうる。そして日本が固有に有する自然との共生による持続可能なライフスタイルがアメリカを始めとする先進諸国の未来の地域再生の一助になるものと考えられる。

2009年度は、4月に東京代官山ヒルサイドフォーラムにて、「活きる木／生きる地」展という今迄の活動記録を展示し、同時に同名のシンポジウムを開催し、広く対象地域における問題の所在と研究の方向性を明らかにした。その後、対象地域の現状をより詳細に把握するため、慶応側がフィールドワークやヒアリングを通して地域に積極的に入り込むことにより、



プロワークショップ中の地元におけるヒアリング風景

伝統的に行われ引き継がれて来た生活習慣や地域特有の産業、有効と思われる地域資源を洗い出し、それらの抱える問題や発展可能性を整理した。その上で、8月に MIT と慶応によるプロワークショップを行い、建築・都市デザイン、ランドスケープデザイン、都市計画の専門家、それらを学ぶ大学院生、地域づくりに従事する地元関係者、そして地域住民を巻き込んだ地域づくりのための活動を行った。専門家としては、木材を用いた古民家再生を専門に手がける Geoffrey Mousas 氏、木材の不燃化技術を開発した浅野成昭氏、ランドスケープの視点から町づくりを捉える北海道大学大学院坂井文氏、地元地域づくり協議会代表理事川西章則氏、MIT 神田駿氏を招聘し、シンポジウムを開催した。同時に展示会を開催し、地域に新たに居住することを目指した地域づくりでは何が求められるかを協議した。

また、9月より地域福祉の充実のために滋賀県社会福祉事業団によるデイセンターの企画が本格化し、慶応大学ではその基本構想を作り、その後も基本設計、実施設計に携わり、現在6月竣工を目指して工事監理補助を行っている。ここでは地域の産業である林業の活性化を目的に地元の木をより多く用いることを目指すとともに、地域固有の建築スタイルである「余呉型」と呼ばれる古民家の空間構成、構造システムを採用した地域色豊かな建築を目指した。85%以上の県産材を利用し、地元の工務店による地産地消の考え方に基づく新築の建築プロジェクトであり、今後若い世代のUターンや新たな移住に向けた実験住宅と考えられる。ここでも夏に行われたシンポジウムやプロワークショップの知見が生かされ、地域の資源を有効に用いた計画となっている。

また対象地域内に、地元有志の協力により、町づくりの研究拠点となる古民家改修工事がスタートした。これは地元名産の谷口杉の本拠地である谷口町に在る築110年以上の「田舎造り」と呼ばれる古民家に対し、48年前に改築した部分を撤去しオリジナルの空間に戻すとともに、その空間への新たな地元谷口杉を用いたリノベーションを行うプロジェクトである。現在撤去が終わり、新たな床を貼る作業が進行している。

研究成果：



新築の介護施設現場風景中の地元におけるヒアリング風景



解体を終えた研究拠点となる古民家

MIT および慶応の教員および学生に加え、木造建築、木質材料の専門家による本研究プロジェクトが単に建築の発展可能性を示すばかりではなく、木材の使用用途を多目的に考え適切な量の消費を促進することにより、地域が長く営んできた産業を復興し、地域微文化を再び活気づけることに繋がる。本研究計画を遂行するために様々な地元民とのコミュニケーションを行ったが、その過程を通してこの認識が徐々に地域に浸透し、地域の誇りが回復されてきた感触を得た。木質資源の可能性に関する研究は近年捗々しく、それらの成果を考慮しながらも、同時に固有の地域ならではの技術や習慣に基づいた研究を行うことが肝要であることが確認できた。

今後の研究の発展可能性：

地域の最も手慣れた手法により、地域の生活を保全することが最も持続可能な地域再生手法であるという認識の下、今後はより進化した地域木材資源の有効活用方法を模索し、地域が徐々にではあるが自立した再興を可能とするプログラムの提案を行っていきたい。